

附属図書館の珍本—公開展示『学びの世界』の選書から—

京都大学人文科学研究所東方部 助手 宮 紀 子

それは、今年4月のある日届いた一通のE-mailからはじまった。差出人は文学研究科国語国文学研究室の木田章義教授。用件は、前月、附属図書館所蔵の『幼学指南鈔』が重要文化財に指定されたことをうけ、「学びの世界—中国文化と日本」と題する展示会を開催するにあたっての協力要請である。木田先生とは、ほかに要請を受けた同僚の古勝隆一、古松崇志、研究員の井上充幸の各氏とともに文部科学省の特定領域研究（A）『古典学の再構築』の領域横断研究「日中韓版本研究班」等でご一緒させていただいており、今回の依頼も、まさに展示会のテーマと研究班のテーマが重なるが故であった。『幼学指南鈔』が、中国唐代の類書とよばれる一種の辞典『芸文類聚』、『初学記』の影響を受けて作成された書物であることから、漢籍では、日本への中国文化流入の第二波といってよい14世紀（日本は鎌倉室町時代）の大元大モンゴル^{ウルス}国治下の出版物、なかでも類書と中国文化の受容を語るうえで欠かせない五山の禅籍を中心に且つできるだけ多くの貴重書を紹介するというのが私たちに与えられた課題であった。古勝氏がここ数年調査されてきた重要文化財を多数含む清原家の旧蔵書（清家文庫）を、古松氏が自身の研究課題のひとつである五山禅籍を担当するというのは、当初より決まっていたが、困ったのは残りのセクション。率直に言って、貴重書庫でひととおり見た限りでは、元刊本をはじめ骨董的価値のある漢籍善本は五山関係のものがほとんどである。ならば、普段の研究でわかってきたこと、多くの機会に話してきたことを、じっさいにモノそのもので表現、発信してみたい。

朝鮮の王や貴族、日本の五山僧にも読まれた『事林広記』という大元時代に作られた挿絵入

りの類書—百科事典がある。この類書は、じゅうらい挿絵があること、福建省の書肆が立ち並ぶ建安で刊行された本であること、内容が占いや医学、薬学、数学、双六や囲碁等の遊戯、音楽など多岐に亘ることから、“民間の”日用類書だとされてきた。複数の元刊本、明刊本、抄本、和刻本があって、内容も少しずつ違うために、これら共通のものと祖本をさぐるという少々不毛な試みもなされている。しかし、ここ五年ほど、国内外に所蔵される同時代に刊行されたさまざまな分野の書籍の調査、挿絵の写真の収集を行っているうちに、この書がじつは、ありとあらゆる分野のことをヴィジュアルに広く知りたいという、モンゴル時代特有の精神に基づいて、既存の書籍の挿絵、内容を抜粋して寄せ集めたテキストであることがわかってきた。大元時代までの漢籍をひととおり集める作業は自家版『事林広記』を作ることにほかならない。そもそも算法、吏文、医薬、卜筮などの学問は、決して商人や胥吏、医者、薬屋、占い師等の専売特許なのではなく、モンゴル時代の文人たちも、「儒者は一事の不知を恥とする以上、雅論でなくとも究めざるを得ない」として、最低限の教養として学んでいたのである。実学の勉強は、かれらが奉じた朱子学自体が多分に推奨していたことでもあった。

「類書は雑学の書にもとづく」—附属図書館の貴重書の中にもこれを実証できる、しかも珍しい資料はあるだろうか。朝鮮、日本の人々がいかに消化したかをうかがい知ることのできる資料はあるだろうか。ちょうど井上氏も『事林広記』を基点としてそれと連動する『六経図』や宋代の拓本など図像資料とその他の類書を扱うことになったので、展示としても一貫性はある。こうして書庫内での探索がはじまった。以

下に、じゅうらい重要視されてこなかった貴重書の書誌を紹介したい。

(1) 陽村先生入学図説 前後集 (高麗・朝鮮) 権近撰 高麗恭讓王二年／洪武二三年(1390)完成、朝鮮世宗七年／洪熙元年(1425)刊行 一帙一冊 外寸二七．三×二〇．二cm 板框一七．三×一五．八cm 朝鮮版、楮紙、一四行×二二字、四周単辺、有界、版心白口 内向二葉花紋魚尾 刊記：洪熙乙巳夏晋州牧繡梓備考：洪武庚午(1390)権近序、洪武戊寅(1398)夏五既望三峰道人鄭道伝識、洪熙乙巳(1425)秋七月壬申門人正憲大夫芸文館大提学集賢殿大提学知經筵同知春秋館事兼成均大司密山卞季良跋 河合文庫Ⅱ Ⅱ 7<199559>

洪熙元年の『入学図説』は、現行のテキストでは、大東急記念文庫蔵の洪武三〇年(1397)に晋陽で刊行された二巻本の木活字本に次いで古く、韓国にも所在を二カ所しか聞かない希少な版本である。封面は大元時代の出版物の影響を濃厚に感じさせる。ただし、高麗大学校晩松文庫に、やはり「洪熙乙巳夏晋州牧繡梓」の刊記を有し、版式が全くことなるテキストがあり、こちらが初版で、河合文庫本が後刻である可能性もある。

(2) 大易断例卜筮元龜 (大元時代) 建安 蕭吉父撰集 大徳十一年(1307)刊、書写年不詳 一帙二冊 外寸二六．二×一九．四cm 板框二三．三×一七．七cm 第一冊：抄本、九行×二八字、注双行、四周単辺、有界／第二冊：抄物、八行字数不一、注双行、四周単辺、有界 刊記：昔大徳十一□□夏五平水進徳齋為記 備考：各冊第一葉に宗密(白文)、大通(朱文)の印 1-62 Ⅱ タ Ⅱ 1貴<64452>

一冊目が大徳十一年刊本の抄本で上巻のみを収める。目録には、上巻として「総例」「六神」の二門を記すが、じっさいには、さらに「天時地利」から「胎息」まで計十五門を収録する。二冊目は一冊目の「総例門」「六神」に対する注釈で『鬼谷断』『鑑明断』など佚書を引用、

注釈者は、大通と考えられる。『卜筮元龜』は、明朝廷の図書目録である『内閣蔵書目録』「技芸部」に鈔本一冊を記録するが、現在では、国外ではただ一カ所、中国江蘇省鎮江博物館に清代の抄本が所蔵されるのみで、しかも全八巻からなるといい、本書とは別系統のテキストである。国内では、名古屋蓬左文庫駿河御譲本の天正六年(1578)が上中下巻のうち後ろの二巻を、大東急記念文庫の室町末期抄本が巻下一巻を蔵するほか、足利学校、大阪府立図書館等数箇所に寛文六年(1666)二條通鶴屋町田原仁左衛門所刻の抄物が伝わる(ただし、寛文六年の抄物と本書第二冊の抄物はまったく別物である)。したがって、上巻のテキストは、世界でおそらくここにしか存在しないわけである。モンゴル時代に流行した占い「断易」のテキストは、『事林広記』『卜史』にその一端をうかがえるものの、こんにちあまり残っておらず、学術的な価値もひじょうに高い。本書を刊行した“平水進徳齋”は、至大三年(1310)には、金末の文人元好問の『中州集』を出版したことで知られる。平水は、金朝以来、華北の出版の中心地で、精緻な版刻技術を有し、はやくから版画、纂図本も登場していた。断易の流行には、モンゴル朝廷の庇護をうけた華北の道教教団、全真教がかかわっている可能性が大きい。平水は全真教ゆかりの地でもあり、それを示唆する資料としても貴重である。

(3) 新鐫徽郡原板夢学全書 二巻 (明代) 撰者不詳、書林 楊玉琳梓行 刊行年不詳 一帙一冊 外寸二三．七×一三．七cm 板框一九．四×一一．八cm 明刊本、上中下三段(上図下文)、四周双辺、白口、有界 封面：半留堂新刻／解夢靈書／書林楊玉琳發行 近衛文庫Ⅱ 8-80 Ⅱ ム1<1116621>

中国国家図書館に同名の書があるが、首巻および三巻の全四巻からなり「書林 熊建山梓行」とある。近衛本と国家図書館本には共通の祖本があり、互いに兄弟関係にあると考えられる。

しかし、近衛本が直接もとづいたテキストでは、首巻および巻一が既に欠落していたので、半留堂の楊玉琳は、巻二を巻一、巻三を巻二に変え、封面に『解夢靈書』と題し、まったく別の書であるかのように売り出した。その細工のあとが、各巻標題の数字の箇所にはのこっている。国家図書館本に比べて挿絵も写し忘れが多い。しかし、国内外ともに、ほかに所蔵を聞かず、また夢占いの資料自体もほとんど残っていないことを思えば、貴重な刊本といえるだろう。

(4) 図像黃牛經全書 上中下三巻 著者不詳 一帙一冊 明正徳五年(1510)刊、明嘉靖二十一年(1542)重刊 外寸二三・二×一二、五cm 板框一六、六×一一、五cm 明建安刊本、上図下文、十一行×十五~十七字、四周双辺、有界、版心黒口 刊記：□者太歳壬寅年四月吉日 日仰書叩土術士編集 □□廿一年孟夏□□勤有堂新刊 備考：黃牛經病症目錄：書肆旧有黃牛明伶經，其明左誤者多。今有牧□悠君，求病京本，臚録校正，利行伝者，后享医者，分其神効，真方有其必，孰可万无一失。／皇明正徳五年大歳庚[午]年仲春校正刊行／卷頭図「賈相公図像牛經方論卷之二」／新刊図像黃牛經全書卷上／新刊牛經明經集中巻／新刊造父黃牛經巻之中／新刊造父黃牛經巻之下 富士川文庫ⅡスⅡ 28<186686>

上図下文形式の元刊本に溯ることができるテキストだが、覆刻に覆刻を重ね、はからずも明の版刻技術の悲惨さを表わす好例となっている。ただ、この書は富士川文庫本以外には所蔵を聞かず、その意味で貴重な書といえなくもない。唯一アメリカ議会図書館にも明刻本が収蔵されているが、刊記を欠き、同版であるかどうかは不明である。

(5) 飲膳正要 三巻(存一、三巻) (大元時代) 忽思慧(ホスフィ)、常普蘭奚(ブラルキ) 編集 一帙乾坤二冊 天曆三年／至順元年(1330)刊、成化十一年(1475)重刊、天明二年(1782)書写(外寸)二八、〇×一六、四

cm 抄本、一〇行×二〇字、無界 刊記：(第二冊末尾)成化乙未鼎新刊行／奥書：元人飲膳正要，余質訪此書，幾乎十余年矣。遍索故家，屢徵好事，無有焉。以為此方亡伝本也。偶價望三英氏医官玄稿内，載藏此書。因托侍御医劉君之子子廉，而物色之。望氏之書，尽在于江東葛飾營庫置之。時三英氏即世既久，後嗣不愛讀書，却不令人窺，竟不可得也。有日向陶菴氏，望氏門人也。嘗著本草釣衡考異。聞其家有伝本，子廉三詣，而始得之，各抄一部而蔵焉。且与子廉約、非篤嗜如余二人，不許輒視云。天明二年壬寅春二月吉安子坦題／裏表紙見返し：隈水田揚子顯父 備考：「序」天曆三年五月朔日奎章閣侍書學士翰林直學士中奉大夫知制誥同脩國史臣虞集／「上表」天曆三年三月三日飲膳大医臣忽思慧進上、中奉大夫太医院使臣耿允謙校正、奎章閣都主管上事資政大夫大都留守内宰隆祥總管提調織染雜造入匠都總管府事臣張金界奴校正、資徳大夫中政院使備政院使臣拜住校正、集賢院大學士銀青榮祿大夫趙國公臣常普蘭奚編集 富士川文庫ⅡイⅡ 419<705847>

『飲膳正要』の刊本は、北京大学に元刊本とみられる残巻が一種蔵されるほか、明景泰七年(1456)に景帝の命令によって、元刊本をそのままに内府で覆刻したテキストが静嘉堂文庫にあり、これが『四部叢刊続編』に影印で収められたことから、もっともよく知られている。台湾故宮院蔵本も景泰本とされているが、彫刻技術の荒さ、版木の摩滅などから判断して、静嘉堂本の後刻とみられる。本書は、すこしあとの成化十一年(1475)の刊本に忠実にもとづいた抄本である。成化十一年の刊本そのものは、こんにち残っておらず、存在したこと自体、従来ほとんど知られていなかった。しかし、この抄本から、成化本が景泰刊本とことなる系統の元刊本を覆刻したことがわかる。しかも、「聖なる語」の改行抬頭がモンゴル朝廷の書式にしたがってより厳密におこなわれており、成化本にもとづいた元刊本のほうが、好いテキストであ

った可能性が高い。

(6) 世医得効方 十九卷、目録一卷 (大元時代) 南豊州医学教授 危亦林撰、江西等处官医提举 余賜山校正、建寧路官医提領 陳志刊行 後至元三年(1337)完成、至正三年(1343)刊、書写年不詳 三帙計二〇冊(二帙十九冊、一帙一冊)二六、四×一八、二cm 抄本、一二行×一九字、無界 備考:「至元三年十一月江西等处官医学提举司申太医院抄白」、「至元五年太医院議」、「至正三年仲夏建寧路医提領陳志序」、「至元四年王充耘序」、「太医院官僚名單」、「至元三年七月既望危亦林序」／各帙第一冊第一葉「宮崎架蔵之書」朱方印 富士川文庫ⅡセⅡ8<185695>／富士川文庫ⅡセⅡ173<706065> 大阪府立図書館の石崎文庫に元建安刊本、およびそれを覆刻した明正徳元年(1506)書林魏氏仁実書堂刊本、朝鮮古活字本(甲辰活字)、内閣文庫に朝鮮版(世宗七年／洪熙元年(1425)覆元刊本)が蔵される。元刊本は、半葉十一行×二二字であり、本書は、直接には和刻本(台湾国家図書館蔵、この和刻本自体がめずらしい)を写したものであることがわかる。元刊本は「聖なる字」において四字抬頭、和刻本は三字抬頭であり、したがって本抄本は未知の元刊本に基づくと考えられる。前掲の『飲膳正要』の例といい、抄本を軽視できない所以である。

以上の書物の詳細については、『学びの世界—中国文化と日本』(京都大学附属図書館 総合博物館 大学院文学研究科 2002年10月)の図録解説を参照されたい。なお、この図録は、従来のものとことなって、文学研究科の協賛を得て、研究成果の一般社会への還元をより強く意識し、且ついに研究と直結する大学附属図書館の独自性を出せるか、模索した試みであった。全冊カラー、纏まった量の解説と最新の情報—現在、中国でも台湾でも、各所蔵機関の「顔」となる善本図録、目録の作成は、極めて熱心に行われている。四月から十二月まで八か月、時間、体力、気力ともにかなり消耗したが、

同時に貴重書庫で長時間現物に触れ、手当たりしだいに調べること、異なる分野の研究者との意見の交換、まことに贅沢な経験をさせていただいた。書庫の中を歩き回る幸せは、現在奉職している人文研でもしばしば感じるものなのだが、目録から何か目的を持って探し、一つ一つカウンターから出してもらうという一方通行ではなく、書物が私たちに自分の存在をアピールしてくるのである。ふだん版本ばかり扱っていると、抄本は見た目に美しくなく敬遠しがちだったが、今回の選書によって、抄本の徹底的な調査の必要性を感じた。まだまだ書庫には、未知の刊本の系統を引くものがあるにちがいない。富士川文庫に意外に貴重なテキストが多く蔵されることも判明した。せっかくいいものをもっているのだから、研究しないともったいない。むろん保存、維持も大事だが、こうした発見の機会を、より増やしていただけるとありがたい。具体的には、展示会準備や古籍善本の扱い方、書誌学等を大学院の実習として組み込んでもいいように思う。というのも、とくに近年の文献の電子化によってモノそのものに対する常識、関心が失われつつあるように、感じるからである。それに毎年、展示会のきちんとした図録をつくっていくことは、不備の多い既存の目録を作り直す作業にもなるだろう。

(みや のりこ)